A-XII-3

慢性期重症頭部外傷症例に対するバクロフェン髄注療法の1経験

[1]松波総合病院　脳神経外科, [2]木沢記念病院　中部療護センター　脳神経外科
○八十川　雄図[1], 加藤　貴之[2], 奥村　歩[2], 篠田　淳[2]

頭部外傷後遷延性意識障害を後遺している症例の中には、全身各部の筋緊張亢進を伴っている例が少なくない。この筋緊張亢進状態がリハビリテーションなどの治療の妨げや介助量の増加につながってしまうことが多い。

今回我々が経験した症例は、交通事故により脳挫傷、彌慢性軸索損傷を受傷した29歳男性。急性期治療により、救命はできたものの重度の遷延性意識障害を後遺し、全身の痙縮が併発している。そのため、基礎代謝亢進による体重減少や39度を越す発熱、排泄介助などの介助量の増加がみられた。薬物投与やリハビリテーションを行ったが、全身状態や筋緊張亢進状態は若干の改善に留まった。

今回本症例にみられた痙縮に対し、バクロフェン髄注療法を行った。左前腹壁皮下にポンプを植え込み、L2－3 レベルより髄腔内にカテーテルを挿入しカテーテル先端を Th11 レベルまで進入させた。術後、下肢や腹壁を中心に筋緊張が著明に改善し、体温コントロールも良好となった。体重については今後の観察項目であるが、バクロフェン髄注療法が著効した重症頭部外傷症例を経験したので報告する。